

qp きゅーびー

画家。一九七九年兵庫県生まれ。谷川俊太郎『二十億光年の孤独』『62のソネット+36』（集英社文庫）の装画や、雑誌『真夜中』（への寄稿）（3・9・11・12号）といったイラストレーターの仕事の一方、専門分野に囚われず、写真・動画・詩文など自身の日常に根づいた創作をし、インターネット等で発表する。本誌にはZOOで装画および連作写真《人間の位置》を提供。qpの写真は身近な事物を写すが、それは所謂ありふれた日常ではない。人にせよ物にせよ猫にせよ、対象を観察する自分の驚き、親しみ、憧れ、畏怖、それらそのものを湛えると同時に、その光景に外から意味を与え、それが世界にどう位置づくものか示そうとするしたたかさがある。覗き見るような身体的な眼差しと、どこか引いた傍観者の距離感。この視線の二重性によって、窓からは日常を超えたもう一つの日常がもれ出す。
<http://www.k5dion.ne.jp/~yokogao/>

柴崎友香 しばさき・ともか

小説家。一九七三年大阪府生まれ。二〇〇〇年のデビュー作『まよりのできごと』（河川文庫）から既に際立つ、複数の場所の巧みな関係づけとそれによる小説空間の生成は、柴崎が大阪府立大学で人文地理学を専攻していたことと無縁ではないが当然それだけで説明できもしない。複数の場所または人間が相対化され遍在するという空間図式は、「人の気持ちは分らない」という自らの基本的な人間観に基づき、従ってそこではあるかないか判然としない内面よりも目に見える外見が先立って小説を動かす。ある場所（人）とある場所（人）は隔てられてはいるが、その間にあるのは「壁」ではなく「窓」であり、事実、窓にせよカメラにせよテレビにせよ、小説の中ではガラス越しの視線がしばしば重要な場面を生む。例としては最新作『わたしがいなかった街で』（新潮社 第23章の奇跡を見よ）。
<http://shiba-to.com/>

中山英之 なかやま・ひでゆき

建築家。一九七二年福岡県生まれ。建築が領域を固定してしまふこと、人々の活動や認識を固定してしまうことに抵抗する中山の志向は、東京藝術大学大学院の修士制作《動く窓の家》に早くも表れ、現在まで一貫する。多数のスケッチと共に自作を語る『中山英之／スケッチング』（新館書房）や、本誌ZOOのアンケート、「ZOO」の座談会の発言にもその意識は窺える。建築は人々が自由で主体的で生き生きとしていられる、そんなダイナミックな状況に寄与すべきである。例えば最新作《Y邸》の勾配屋根に開けられた天窗（本誌裏表紙）は、隣家の白い壁と、それに呼応して白く塗られたこの住宅の外壁との間を往来する光の運動を屋内に導く。領域を内部で固定させず外部と動的に関係づける。その初期設定は外部の変化を受けて更新され、主体は生活の中で自身の位置を能動的に捉え直す。
<http://www.hideyukinakayama.com/>

まど かんさつ
窓の観察 『建築と日常』別冊

【発行日】2012年9月8日 【頁数】64頁 【著者】qp 柴崎友香 中山英之 【編集発行者】長島明夫
richeamateur@gmail.com 【表紙デザイン】大橋修 (thumb M) 【表紙写真】qp 【印刷・製本】ユアプレス